

子供を戦場へ送った母へ

母の心

「先生、私は今迄、無信心な日暮しをしてまいりました。しかしこのまゝではいられなくなりました。どうか御縁に会わして下さいませ。どうもお念仏の意がよくわかりません。」

それに、この度私の子供が召集されて出てまいりました。あちらへまいりましてからは、一時も忘れることが出来ません。どうかお国の為めに、立派な働きをしてくれよ、そして無事で帰ってくれよと、そればかり思われてなりません。

そこで私は毎朝、八幡宮にお参りして、どうか息子が無事で帰って来てくれるようにお祈りしております。それは悪いことでしょうか。」

それは、人の子の母として、愛子を戦場に送った者の、偽らざる告白であり、無理のないことである。お国の為に十分な働きはしてほしい。しかし無事で帰って来てほしい。それ故に、それを神様にお祈りする、それは誠に無理のないことである。街という街、駅という駅、田舎でさえも、千人縫ひの洪水で、トある。夫の出征であるう、幼兄を背に宴をふり乱して、一軒々々千人縫ひを頼んで歩いている女がある。その誰もが、弾丸除けの千人縫ひである以上、無事で帰って来て下さいと思わない者がいるだろうか。

冷たき情

だが、それだけでは、母は救われない。

「お母さん、貴女はそうすれば子供が無事で帰って来ると思っていますか。」

「……………」

「無理はないと思います。しかし間違っていることは、間違っていると知らねばならない。貴女の言うことを聞いていて、お念仏の真の意がわからない訳も、明らかにわかりました。」

「どうか、教えて下さい。ほんとうにお念仏が申されるようにして下さい。」

「貴女は、乃木大將や、楠正成公を知っていますか。どちらも神に祭られている方です。日露戦争の時です、乃木大將には、保典、勝典という二人のお子様がありました。お二人とも戦死されました。大將は、三つの棺を列べて出すまでは、葬式を出すことは出来ない、東京の留守宅の奥様に言っただけで出されたそうです。然るに大將一人無事で凱旋された時、『多くの兵を殺して、どの顔さげて、父老たちに会われるか、陛下に申しわけがあるか』と、船からなかなか上陸されなうです。楠正成は、朝敵と戦いぬいたあげく、七度生れて朝敵を滅ぼさんとて、兄弟刺しちがえて死なれませんでした。神社は、皆そうした我ら国民の祖先をお祭りしたところ。若しそうした国に命を捧げた方々の前に、息子の命を助けて下さいとお祈りしたら、神様は、どう思われるでしょう。神意に叶はぬ相済まぬことだと、わかりませんか。国のため、大君のために、命を捧げ、身を捧げた方々の前に、自分の愛や欲の勝手をお願いする、それが大変なことだとわかりませんか。」

それでは、それでない何処か、この願いを受つけて下さる所はないかと言うかも知れませんが、若しそれを受つけるところがあるとすれば、それは神様ではない、悪魔です。迷うた心の幻です。

軍隊にある貴女の御子息は、決して、貴女のようにには思つてはられません。身も心もみ国の為^{ため}に投出して働いていられるに違いありません。だが私も武運長久なれと念じないではられません。

雑修の失

「仏号むねと修すれども 現世をいのる行者をば

これも雑修となづけてぞ 千中無一ときらはるる。」

これは御開山聖人の御和讃であります。如何にお念仏を修するとも、現世祈祷する者は、これも雑修自力のこゝろであつて、千人中たゞの一人も、真実の念仏行者でないが故に助からないと言われるのであります。先日も、神様のお力で病気を治してやるという男が現われて、大変沢山な人が迷い、後になつて大変なインチキ師であつたことがわかつたそうであります。「人の道教」等が、お上からやられたことは、貴女も知つているでしょう。人間の勝手を神様に祈る心、その雑修自力がいけないことは、わかるではないか。先年ある所では、息子が、兵隊検査を受けねばならぬ、採られてはいけないというので、家内中が、お大師さんの八十八ヶ所に参つて不合格を祈つた。ところが、甲種合格であつた。そこで今度は、籤のがれを祈つたところが、イの一番だつたそうです。弘法大師こそ迷惑です。宗教の正しい信心がないとこんなことになります。

つまらぬ迷信に迷ふ心も、迷信で迷はす者も、その心の奥には、同一のものがあるのです。大本教や、人の道等のような迷信と同一の株が、心の奥底にあるまゝで、どうして、最勝無上の仏智がわかりましょう。心の底では、久遠の親様に反逆はむかいつつ、それも知らずに、念仏も申す、それを、千中無一と言われるのです。心の底にこの我があれば、今日はよいことに出たようでも、明日はどんな悪いことに出るかわかりません。そこで、心の奥の闇を、仏の光に照し破られて、金剛不壊の大信心を頂かないと、遂に救われる日はあり得ません。

「私が悪うわるございました。悪いことを致しました。」

み仏ありや

「貴女は、今日はこの寺へは、ほんとうにお念仏に生きられる人になりたいと思つて来られたのです。どうです、み仏様はいられますか。」

「それはいられます。」「まことにいられますか。」「それはいられます。」

「もう一度問います。真にみ仏様はいられますか。」

「いられると思ひます……………」

「三度問うとそろそろおかしくなりました。これが最初の問題で、そして最後の問題です。」

世の中に何があるよりも、何がいなさるよりも、み仏がいられるというほど大事はありません。

私どもを、罰しようというのでもない。罪を裁こうというのでもない。清浄真実の大慈悲は、一切衆生の業苦を御自身の大悲の胸中に抱き、若くは不生者不取正覚と、衆生を助けずば、仏も助からない、久遠劫来、貴女の全てを知りつくして、このみ法の座まで育て上げて出して下さった、一時も離れたまはぬみ親があつた！ そのみ親が確かにいて下さるでしょうか。」

「……………」

「その年になるまで、み仏がいなさるかどうか、はつきりと考えもせず、たつた一人で暮して来たのではありませんか。

み親を知らず、信ぜず、自力の刃を大悲のみ胸にあてつゝ、煩惱にひきづられてゆく者は、流転する。しかしみ仏は、信じて後出来るのではない。信じてから後來て下さるのではない。刃向ふ衆生を捨てず、逃げる衆生を抱いて育てあげ、久遠の真実を、その胸中にとゞけずにはおかない親である。貴女は今日、現世祈禱して、み親のみにさからつたが故に、すてられるかわりに、それがあつたらこそ、一番先きに出されたではありませんか。」

「恐ろしい日暮しをした私でありました。み親を殺し、み仏を盲にしていました。」
「唯一の真実を殺すこと、盲にすること、それより以上の怖るべきことはありません。み仏は確にいられますか。」

「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、いられます、いられます。あゝ私は恐ろしい奴で御座いました。相すまないことを致しました。」

この親

「先年、広島県の河内支部で講習会があつた時、伯耆の国から、遠藤君という青年が来ました。その青年が感想発表の時、立つてこんな話をしました。

私のお母さんは賢いと思います。かつて私の弟妹が二人も三人も病気になりました時、色々な人が親切から、天理教え入らないか、天理教で祈つてもらおうと病実が治る。そのままほつておいては、皆死なれますと、手をかえ品をかえてすゝめた時、母は、御親切は有難いが、たとえ、子供が皆死んでも、そんな無理な祈りをすることは出来ませんとて、どうしても聞きませんでした。この度、私は軍隊に入営致す身であります。ところが母は先日私に、お前はこの度、御奉公に出るのであるが、お母さんにたつた一つ心にかかることがある。それはお前が真にみ仏様に救われて念仏申しているか、どうかということである。聞けば、此の度光明団の講習があるそうだが、お前は是非行つて聞いて来てくれ。そして何時死んでもいいようになつて、入営してくれといいました。私は、行つて聞きたいが、この貧しい中ではという、こういうこともあるうと思つてお母さんが用意しておきましたとて、旅費を出してくれました。母のおかげでこの度は、有難いことに会いました。

これが、その青年の涙ながらの話であつた。誠に賢い母であります。

『仏法は無我にて候』私どもの小さい自力の欲心は未通らない。如来の大慈悲、智慧光に救われて大満足、大安心の上に生かされて、み国の為に死んでくれという母の心を拝まずにはいられません。貴女も、手紙を出すなら、お念仏の尊いことを一口でも言って送りなさい。一切をみ仏の金剛力にまかせきって働いて来いと言ってやりなさい。今までのような心だと、もし万一戦死でもされたら神様までも恨まずにはおられなくなるでしょう。私たちの同胞は沢山念仏申してこの度出てゆきました。

「相すまぬことを思うておりました。悪うございました。恐しい私の正体でございました。お念仏申させて頂きます。」「無理な願をかけるかわりに、子供のことが思われる度に、お念仏申しましょう。今から、行住坐臥み仏の大悲と共に生きさせて頂きましょう。」